むすびに

——「分断時代」朝鮮半島の地域研究——

第2次大戦後，なかば偶然的な事情から朝鮮半島が二つに分断されて以来，はや半世紀の年月が過ぎ去ろうとしている。現代に生きるわれわれにとっては十分長い時間であるが，悠久の歴史においてはほんの瞬間にすぎない。夢中になって生き延びたこの時代の意味を今の時点で再吟味するために，あるいはこの分断状況が民族史のなかのほんのひとコマでしかないことを願うがために，1945年以後の年数を「分断紀」で数えるウィットが韓国の学生運動の一部に流行しているという。

朝鮮が南北に分断されているという現実（分断状況）は，朝鮮半島における問題を考察する場合，常に念頭に入れておかなければならないと強調される。その割には，実際の分析結果にこの視点がどのように反映されているのか明確にされているものは少ない。北であれ南であれその政治経済社会の有りように分断状況が深く係わっていることに誰も異論がない。しかし45年という時の流れはとかく分断状況に対する鋭利な感覚を麻痺させがちである。とくに外国の観察者にすぎないわれわれは，よほどそのことを意識してかからないと忘れ去ってしまうことになる。

ところで，分断状況は決して固定した与件ではない。朝鮮半島の人々は分断状況の形成あるいは変革に主体として係わっている。北や南の社会の有りようは分断状況に制約されていると同時に，分断それ自体を再生産し変化させている。分断状況を動かしがたい外的条件ないしは運命ととらえ，その犠牲者としての立場に自己を置きたい誘惑に駆られているという批評は当事者にはあまりにも冷たいかもしれない。しかし，この誘惑にうち克たないかぎり歴史の主役となりえないことも明白である。

研究所の朝鮮研究のなかに分断の問題を正面から取り上げたものは実はほ

とんどない。北や南の各々の現状分析が中心であり，両者を同時にあるいは同一の枠組みで取り上げたものでさえただの一つ(小牧輝夫編『朝鮮半島――開放化する東アジアと南北対話――』[16]) しかないのが実情である。

しかし，極端なことをいえば北や南のどのような現象であれ分断状況の軋みから自由ではない。上に取り上げた北あるいは南に関する調査研究は総じて，分断状況を意識していたかどうかは別として，明示的ではなかった。分断状況という枠組みを当てはめた場合いかに評価できるのか，これは読者と歴史の判断に委ねたい。